



杉浦すぎうら
重剛しげたけ

〔第十五話〕

杉浦重剛は、第十四話の頭山満とうやまみつると同じ安政二年に、今の滋賀県大津市で生まれました。四歳のとき、安政の大獄あんせい たいごくにより京都でとらえられ、江戸に護送ごそうされる尊皇そのうの志士学者梅田雲浜うめだうんぴんと頼三樹三郎らいみ きさぶろうを見、強烈な印象きょうれつ いんしやうを受けています。

十六歳、膳所藩ぜぜはんからの貢進生こうしんせい（選抜の給費生）として大学南校だいがくみなみこう（現在の東大）に入学。やがて廃藩置県のため学費も出なくなったので、貧乏と病弱の苦しいなかを勉強にはげみました。

イギリスに留学りゆうがくして、化学と農学を専攻せんこうします。帰国後、東大理学部博物館はくぶつじやうかかり掛取締とりしまり、同予備門長どうよびもんちやうを経て、文部省の役人になったり、私立の東京英語学校（のちの日本中学校）をこしらえたりします。また雑誌「日本」を創刊、三十七歳で衆議院議員にもなりますが、すぐにやめてしまいました。国学院こくがくいんや東亜同文書院とうあどうぶんしやういんな

どの経営にあたったのち、十年ほど病気で療養生活をし、世間からはすっかり忘れられて、新聞に「故・杉浦重剛氏」と書かれたことがあったほどです。

ですから、大正三年この杉浦が、東宮御学問所御用係とうぐう おがくもんじょうご ようがかり（皇太子殿下に倫理りんりをお教える）を拝命したとき、みんなびつくりいたしました。しかも肩書きとしては、たかが私立の小さな日本中学校長にすぎなかったのですから。

昭和天皇の幼少年期、御教育にたずさわったのは、学習院長乃木希典大将、東宮御学問所総裁東郷平八郎元帥など、超一流の方ばかり、そのなかにあつてあまり世に知られていない杉浦が起用されたのです。杉浦を推薦したのは、浜尾新・山川健次郎・沢柳政太郎など教育界の大物たちだったようです。

いわゆる帝王学の基本である「倫理」を、御進講ごしんこう申し上げるのはたいへんなことです。皇太子殿下に倫理をお教えるこの仕事に、杉浦はいのちを捧げる決心をいたします。生まれつき虚弱きよく せきじやくで、やせた小男なのに、親友だった豪傑頭山満ごうけつ さんまんをしのぐ、氣迫きはくと胆力たんりよくと信念の持ち主でした。

初めての御進講の際は、招魂社しょうこんしゃ（今の靖国神社やすくにじんじや）におまいりし、草稿そうこうを神前におそなえしてから御学問所にうかがいました。一語一句、心血を注ぎ、熱誠ねっせいこめた講義でした。東郷総裁も、毎回かならず熱心に聴講ちやうこうしたといわれます。

皇太子殿下が、久邇宮良子女王殿下くにおのみやながこじよおうでんか（のちの皇后さま）と御婚約のとき、元老で当時最大の権力者山県有朋やまがたありともから、横槍よこやりが入ります。母方ははかたの島津家しまづけに色盲しきもうのうたがいがあり、久邇宮家は御辞退ごじたいなさるべきだと、なんくせをつけたのです。

杉浦は、良子さまのお妃きさききさき教育きよういくにも、やはり倫理を担当していましたので、頭山満の助けを得て、山県の権力に屈することなく、断固だんことして戦います。

まわりは山県とその背後の長州の勢力をおそれる者ばかりです。文字もじどおり生命めいをかけ、杉浦・頭山は勝ちました。医学的にも、色盲・色弱しきじやくのおそれなしと証明されたのであります。

めでたくお二人の御成婚ごせいこんを見とどけ、その一か月後に、杉浦のいのちの灯は燃え尽き、魂たましいは天に帰って行きました。「道德的勇氣どうとくてきゆうきがなければだめじゃ」とは、「杉

浦重剛座談録ぎだんろく

にある言葉ですが、真の勇者ゆうしやとは、こういう人物のことでありましょう。

大正十三年（一九二四）七十歳没

○ 杉浦重剛の名前は、初めて知りました。

昭和天皇に倫理をご進講されたとは……。立派な人物に驚きました。

○ この冊子づくりで大いに興味をもった人物は、頭山満と杉浦重剛です。そのお二人が親友とは嬉しくなります。

○ 「道徳的勇気がなければだめじゃ」の言葉を大切にします。

（M生）